
ハートブローカロックン

hisasi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハートブローカロックン

【Nコード】

N3223I

【作者名】

hisasi

【あらすじ】

バレンタインの日、ケイと言う女の子の前に、鍵の精 ロックンが現れます。ロックンはケイの好きな男の子の心を鍵であける事が出来て、彼の好きな女の子の名前を知る事もできるのです。

さあ、ケイはどうするのか？男の子との恋の行方は？

全てはロックンにかかっています！

(前書き)

自分に嘘をついたら本当の事は見えませんよね？

そんな気持ちを書いてみました。

教室の窓際で一人の女の子が机にうつぶせになりながら、横目で冬の透き通るような青空を見ていました。聞こえてきたのは溜息。

「はー。どうしよう。でもなあ」

彼女の名前はケイ。小学六年生で、クラス一勉強ができる、本が好きな眼鏡っ子です。

そんなケイが何で溜息ついているかって？

それは今彼女が恋をしているからです。彼女が好きな男の子は、黒板の前で友達とおしゃべりしている城君。彼は面白くって、クラス一駆けっこが早いから皆の人気者です。

今日はバレンタインなのですが、すっかりチョコを用意していたケイは、城君の事が気になって気になって仕方ないのに、どうしても気持ちを打ち明けられそうになくてちっちゃなハートがむずむずしているのです。

「城君って誰が好きなんだろう？誰か教えてくれないかな。彼って女の子とあまり遊ばないし、あまり喋った事ないから良く分からななんだもん。でも、私とよく目が合うんだ。いつも微笑みかけてくれるし。もしかして、もしかして、私の事好きなのかも。まさか、そんな、両想いだったりして。キヤー」

ケイは自分でそう思って、恥ずかしくなって腕の中に顔を伏せました。頭の中で笑顔の城君が駆け巡ります。すると、ふと誰かが彼女の髪の毛を軽く叩きました。

「彼の好きな人知りたいの、ケイ？」

ケイはびっくりして顔を上げました。すると、机の上に黒いチョッキを着た、掌ほどの大きさの白いウサギが後ろ足で立っているのが目に入りました。

「驚いた、あなたが喋ったの？あなた誰？」

すると、ウサギは長い耳の間にちよこんと乗っていた小さなシルク

ハットを手に取って、ケイにお辞儀しました。

「喋って当然さ、僕は妖精だもん。ケイが願い事したから現れたのさ。名前はロツクンだよ」

「ロツクン？変わった名前ね。それより、あなたは何で私の名前を知ってるの？」

「そりゃあ、僕は鍵の妖精だからね。これを使えば、何てことないのさ。ほら！」

ロツクンはチョッキの内ポケットに手を入ると、得意そうに腕を振り上げました。すると、ポケットの中からロツクンの体と同じくらいの大きな鍵が出てきました。

「まあ、綺麗でピカピカの鍵ね！」

ケイはロツクンと鍵を見比べておかしくなりました。鍵が大きすぎるからです。

「これはハート（心庫）・ブレーカー（破り）と言う鍵だよ。これがあれば誰の心も開けられるのさ。そして、知りたい事が分かるんだよ。そう、ケイが今一番知りたい事もね」

ロツクンの言葉に、ケイは目を見開きました。これがあれば城君の心が見れる！ケイは顔を真っ赤にしながら、ロツクンに熱い眼差しを送りました。

「私、城君の好きな人が知りたいの！ロツクン、それ使って彼の気持ち確かめて！」

すると、ロツクンはじつとケイを見詰めました。

「何でそんな事知りたいのさ？」

「だって、私、城君にチョコあげて、告白したいんだもん。城君が私の事好きだったら、何の不安も無いじゃない」

「でも・・・好きじゃなかったら？」

「そしたら、告白しないままにいるの」

「やめちゃうの？」

「そうよ。だって、振られたら悲しいじゃない」

ロツクンは少し考えました。すると、ケイはロツクンの体を捕ま

えてゆすりました。

「私、どうしても知りたいの！お願いロツクン、その鍵使って、城君の心を開けてみて！私の願いをかなえる為に来たんでしょ？」

「それはそうだけど。うーん、でも、ケイがそこまで言うなら仕方ないね」

そう言うつと、ロツクンはふわりと浮き上がって、黒板の前にいる城君の頭の上に向かいました。そして、大きな鍵を彼の頭に差し込みました。すると、城君の頭から光があふれ出し、それが黒板に文字を写しました。

「僕が好きな女の子はクミコちゃん」

それを見た瞬間のケイの顔ときたら。口を大きく開けて、もう目には涙が溜まっていましたし、同時にさっきまで浮かれていた自分が恥ずかしくなって、眼鏡が曇るほどみるみる顔が赤くなっていきましました。

「もう知らない！城君の好きな人が私じゃないなんて。ひどい、ひどいわ！」

ロツクンが申し訳無さそうにケイに近付いていきました。

「大丈夫、ケイ？」

すると、ケイは鋭くロツクンを睨みつけて、泣きながら激しくどなりました。

「ロツクンがあんな鍵持って来るからいけないんだ！ロツクンのせいよ！」

「でも、ケイが見たいからって・・・」

その言葉に、ケイは少し考えると涙を拭きながら、大きく頷きました。

「そうね。そう、ロツクンは悪くないわ。誰も悪くないの。私を好きじゃないんなら、もう城君の事なんて忘れるんだから。もう、ぜんぜん関係ないの」

ケイがそう強がって笑うので、ロツクンは少し残念そうな顔をしました。でも、ケイは構わず話し続けました。

「本当はあんな男の子好きじゃないのよ。ぜんぜん。ごめんね、ロツクン、そんな顔しないで。私は全然傷ついてないのよ。悲しくも無いの。だって、本当は好きじゃないんだもん。きつと、間違っちゃたんだわ、そうじゃなきゃ、いやっ、ロツクン何するの！」

ケイの話の途中で、ロツクンはケイの頭に大きな鍵を差し込み、そして廻しました。すると、ケイの頭から光が放たれて、教室の天井に大きな文字が浮かびました。

「ケイは城君が好き！本当は大好き！」

それを見た瞬間、ケイは大声で泣き出して、傍にいたロツクンを抱きしめました。ロツクンはケイの耳元で優しい声を出しました。

「ケイ、これが君の本当の気持ちだろ？自分の気持ちには正直にならなきゃ。自分に嘘をついてはいけないんだよ。城君が好きなら、たとえ振られたって気持ちを伝えなければ。どんな気持ちにする想いを伝えるって事が大事なんだ。自分に嘘をついてその大切な気持ちを殺すなんて、振られる事より悲しいんだよ。僕はこの鍵を持っているからそれが良く分かるんだ。さあ、ケイが恋してるって気持ちを、彼にしっかりと伝えなきゃね」

ロツクンの言葉に、ケイは泣きながら何度も頷きました。そして、ロツクンを力強く自分の胸に押し付けて、両腕で潰れんばかりにしっかりと抱きしめました。

ああ、ロツクン。ロツクン。ロツクン！

ケイがはっと顔を上げると、そこはいつもの教室で、そこにはロツクンの姿はありませんでした。黒板の前にいた城君は、いつの間にか自分の机に戻ってしまし、窓からは冬の日差しが差し込んでいます。

「夢・・・だったのかな」

しかし、胸の高鳴りと目元に伝う涙はケイにしっかりと感じられました。城君を見ますと、近くの席にいるクミコちゃんや友達と何か喋っています。ケイは少し胸が痛みましたが、さっきまであった迷いは、今のケイにはまるでありませんでした。自分の中ではもう

気持ちが固まっていたのです。

「私、駄目でも城君に気持ちを伝えなきゃ！」

そう、ケイは自分の気持ちに素直に向き合おうとしたのでした。

その日の放課後、ケイは下校途中の城君にチヨコを渡して、そしてしっかりと告白しました。もちろん、すごく緊張しましたが、告白の言葉も震えて、しっかりと城君を見る事も出来ませんでした。ケイは自分の気持ちを伝えたのです。ケイはもう満足でした。

さて、肝心の城君の返事はどうと

「ごめんなさい」

でした。御伽噺ではありませんから、そう上手くいくはずがありません。

でも、ケイの心はすっきりしていましたし、城君ともそれから仲良くなりました。家に帰ってから泣きはしましたけど、ケイの中でその涙は後には残らなかつたのです。

さて、それからだいぶ月日経ちまして、ケイもすっかり大人になったある時、又あのロツクンが目の前に現れたお話をして終わりにしましょう。

それは、ケイが結婚を申し込まれた時の事です。又、あの長い耳をしたロツクンが現れてケイにこう言いました。

「この鍵で彼の心を開けてみようか？」

すると、ケイは口元を緩ませながら、ゆっくりと首を横に振りましました。

「ありがとう、ロツクン。でも、それは必要ないわ。だって、彼の気持ちがどうだろうと、私の気持ちはもう決まっているのですもの。知る必要ないわ。だってそうでしょ？私は彼の気持ちがどうであろうと、彼の事を愛しているのです。そして、これからずっと、彼の傍で生きていきたいと思っているのよ。それに、彼の心が開いた時に、又昔みたいに『クミコ』なんて出てきたらいやじゃない。あれからずいぶん時が経っているんだから」

ケイはそう言ってロツクンにウィンクして、幸せそうな白い歯を

見せました。その顔を見てロックンも安心そうに微笑むと、大きな鍵を黒いチョッキにしまってケイの頬にキスすると、どこかに行つてしまいました。

「ケイ、どうかした？」

「ううん。何でも無いわ。嬉しくて」

ケイはそう言うと、すっかりたくましくなつた城君の瞳を覗き込みました。そして、自分も目を潤ませながら一つ頷きました。

「返事はOKよ」

それから二人が幸せに暮らしたのは言うまでもありませんね。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3223i/>

ハートブローカロックン

2010年11月2日03時52分発行